Japanese Society of Physical Education

B.Malinowskiの機能主義的文化概念とスポーツについての一考察
― 特にその基本的・有機的欲求を中心にして ―

岡田 猛
（鹿児島大学）

impulse; need; activity: culture

1. 緒言

体育・スポーツへの文化論的アプローチは，これまで，学校体育の学習指導論にかかわる内容・教材の特性論的レベル，社会生活におけるその存在態様と機能にかかわる生活機能的レベル，等々多様な展開を示してきたといえるだろう。

その際，スポーツの「文化的資格」については，中心的研究課題を「文化」におく文化人類学をはじめとする諸学者の文化概念が援用されるのが通例である。しかし，その際，文化理論における抽象的・代表的な概念規定が単に引用されるだけで，文化理論を総体的に把握し，そこからスポーツの文化的特性へと内的に論理を展開するという作業は等閑に付されてきたといえるのではないだろうか。

フィールドワークに基づけられた文化人類学をはじめとする諸学者の文化理論を仔細に検討し，そこからスポーツの文化論的理解をすすめる作業は，「体育・スポーツの文化社会学的研究」の基礎的位置づけを与えられるものである。

2. 目的・方法

みずからを機能主義の両極であると称している，B. Malinowski の文化理論を，他の文化論を体系的に提示した晩年の著書「文化の科学的理論」（1944年）を中心にして理解し，あわせてスポーツの文化論的理解をすすめる。今回は欲求に基づく文化理論に焦点をしぼって報告する。

3. 内容・考察

「人間はすべて，一つの動物種に属する」ということは厳然たる事実であり，したがって「いかなる文化理論も，人間の有機的欲求から出発しなければならないことは明白である」。それというのも，「人間や種族のもつ有機的または基本的欲求を充足することは，明らかにあらゆる文化に課せられた最小限の条件である」からである。

このような観点から，明らかに元来は文化の科学の問題ではないが，文化を研究するものにとって，文化の基礎をなす生理学的事実 ― 有機体の生存にとって不可欠な生命活動系列（vital sequence）― を強調することは必要である。

（生命活動系列の表については略）

しかしながら，このような生命活動系列は，人間のレベルにあっては，そのいずれにおいても，文化によって統制され限定され，変容されることは明らかである。端的に生理学的な考察は，必要な出発点ではあるけれども，人が文化的条件のもとでその肉体的衝動を満足させる仕方を考察するときには十分ではない。文化的行動をみる場合，生理学を忘れてはならないけれども，生物学的決定論だけで満足しているわけにはいかないのである。

したがって，生命活動系列を文化的レベルに移しかえる必要があり，それが次の表である。

(A) basic needs	(B) cultural responses
1. Metabolism	1. Commissariat
2. Reproduction	2. Kinship
3. Bodily comforts	3. Shelter
4. Safety	4. Protection
5. Movement	5. Activities
6. Growth	6. Training
7. Health	7. Hygiene

Malinowskiは，上表の5 movement という基本的欲求を満たすための文化的反応としてActivitiesに二つの範疇を認めている。

その一つは，手段としての活動であり，「筋肉を活動させ神経組織を明確に方向づけなければ，人間は何事もできないという事実によって本質的に決定されている」側面である。これは1から7にわたるすべての基本的欲求の充足のために使用されねばならないという，文化的反応にふくまれる活動の基礎的位置づけを示していると考えられる。もう一つは，目的としての活動であり，「規制され確立された筋肉・神経活動が，それ自体目的となっている」ときの「確立された組織された特殊な活動」であり，スポーツ・遊戯・舞踊・祭礼がこれに含まれる。

Ulrich流にいえるなら，前者は"move to learn"にあたり，後者は"learn to move"に対応するものであり，いずれにしても，Activityは手段と目的の統一された意味を内包した概念であると考えられ，スポーツはその目的的カテゴリーに直接には帰属させられている。

NII-Electronic Library Service